

# 東南アジア史学会会報 No. 20

## 第 13 回 大 会

日 時 昭和 48 年 11 月 17 日 (土) • 11 月 18 日 (日)

受付開始・午前 9 時 30 分 開会・午前 9 時 50 分

場 所 東京外国語大学

第 1 日：(4 号館 6 階 大会議室)

第 2 日：午前 (2 号館 4 階 AA 研会議室)

午後 (2 号館 2 階 2210 号室) 懇親会 (AA 研会議室)

(北区西ヶ原 4~5 1~21 電話 917-6111

国電大塚下車, 都電西ガ原 4 丁目)

## プ ロ グ ラ ム

第 1 日 11 月 17 日 (土)

「東南アジアの先史学」

タイ	(10:00~10:40)	伊東照司 (早大)
フィリピン	(10:40~11:20)	青柳洋治 (上智大)
	コメント	大林太良 (東大)
		量博満 (上智大)

一般討論 (12:00~12:30)

### [ 昼 懇 ]

「東南アジアの文学」 — 民族主義と文学 —

インドネシア	(1:30~2:10)	佐々木信子
	コメント	土屋健治 (千葉大)
タイ	(2:30~3:10)	吉川利治 (大阪外大)
	コメント	森幹男 (AA 研)

### [ 小 懇 ]

ベトナム ( 3:40 ~ 4:20 ) 川本邦衛(慶大)  
コメント グエン・カク・カム(東外大)  
一般討論 ( 4:40 ~ 5:30 )

第2日 11月18日(日) 個人研究発表

① 車里・八百と元朝の羈縻

( 10:00 ~ 10:40 ) 喜田幹生(十文字高校)  
コメント 白鳥芳郎(上智大)  
質疑

② タイ宗教における「持続」と「変容」

— Chao Phou 信仰の提起するもの —

( 11:00 ~ 11:40 ) 森幹男  
コメント 田中忠治(東外大)  
質疑

[昼 懇]

西北タイ山地民族:生活編(8ミリ・フィルム)

( 1:30 ~ 4:00 ) 白鳥芳郎  
一般討論 ( 4:00 ~ 5:00 )

総会 ( 5:00 ~ 5:30 )

懇親会 ( 5:40 ~ 8:00 )

---

附記

1. 同封のハガキにて、必ず11月10日までに御出欠及びその他の所定事項をお知らせ下さい。
2. 懇親会費は一般1,000円、学生500円です。
3. 昭和48年度会費1500円(学生1000円)を当日会場にてお納め下さい。また当日参加されない方は郵便振替(口座番号 東京59721)その他にてお支払い下さいますようお願い致します。

発表要旨

## 東 南 ア ジ ア の 先 史 学

### タイ国古代美術史の諸問題(I)

#### — Dvaravati 期の出土品をめぐって —

伊 東 照 司

タイ国古代の王国「墮和羅國」の存在に関してはすでに中国文献を用いての詳細な論文がある。<sup>1)</sup> その墮和羅が梵語の Dvaravati と同一であることは認められ、近年ではその Dvaravati の名を銘刻した二枚の銀貨がナコーン・パトム Nakhon Pathom の地より出土し、この王国が事実存在したことが更に確証付けられている。

メナム河下流、特にナコーン・パトムとウ・トーン U-Tong の地からは種々な美術遺品が出土し、Dvaravati の文化・美術を知る上で重要な資料を提示する。それらはほとんど仏教に関する遺品が主体で、筆者はそれらの内、特に法輪 Dharmachakra と仏陀像について述べる。

まず法輪は東南アジアの内、このナコーン・パトムとウ・トーンを中心多産し、なぜこの地にのみ多く出土するのか、この点に非常な重大性がある。が遺憾にも Dvaravati 研究の好著 P. Dupont 氏<sup>2)</sup> の中にはこれが取り上げられず、近年に至って Quaritch Wales 氏<sup>3)</sup> によるその大雑把な分類が試みられた。しかしそこには様式的な区分を行う上での粗雑さと資料の不足から必ずしも満足しない。Quaritch 氏に先がけ、日本でこの法輪に目を向けた先学もあり、<sup>4)</sup> 筆者は現地で蒐集した断片をも含めて、すべて様式的に整理しなおしてみることにした。そこに銘刻された碑文の問題を提示し、輪部に浮彫されたグプタ式文様の展開を跡付け、それぞれの時代的な前後関係を推定してみた。

仏陀像（石造と青銅製）は後世のクメール派（ロップブリー Lopburi 様式）、スコータイ 派とは全く別個の像容形式をとった一連のものである。この点に Dvaravati 様式の存在が認められるが、不幸にもそれらには一体としてそれが造像された時の紀年銘がない。そのためこれらの年代論はそこに銘刻された碑文の筆体乃至インド仏との比較等から様式的に整理し、その時代的位置を推察するしかない現状である。その碑文の筆体から 8 世紀のものと推定され

るが、一般にDvaravati期と称する6—11世紀間のどの時点に造られたものなのか。またインド仏との類似性を認めるなら、インドのどこのものと符合し、それがどのように相違するのか。これを明確にとらえることによってDvaravati仏の性格を知ることができる。

(スライド使用)

註1. 山本達郎：墮和羅国考，史林第28卷，第4号

註2. Pierre Dupont : L'archeologie Mône de Dvaravati, Ecole Française d'Extrême-Orient, vol. XLI, 1959, Paris.

註3. Quaritch Wales : Dvaravati, 1969, London.

註4. 伊藤平左衛門：暹羅古代法輪に就いての考察，「東洋美術」第11号，1931年

## フィリピンの先史時代

青柳洋治

フィリピンに於ける先史時代の研究は、1940年代後半に刊行されたH. O. Beyerの一連の著作に始まると言えよう。彼はRobert Heine-Geldernの強い影響のもとに自らの発掘及び国内全域に亘って表採された遺物を収集整理し、隣接諸国の出土遺物との比較研究から、フィリピンの先史時代を体系づけた。彼の時代区分は、旧石器時代（6期に細分され、年代として、凡そ500000—20000年前頃），中石器時代（2期に区分され、凡そ20000—8000年前頃），新石器時代（前期、中期、後期に区分され、後期に青銅器の出現を想定している。凡そ6000—200B.C.頃），鐵器時代（前期、後期に区分し、凡そ250B.C.—A.D.800頃），陶磁器時代（凡そA.D.800—1500頃）と5時代に大別されている。尚その年代は、明記されている如く、全くの“estimate”なものである。

1950年代以後になると、W.G. Solheim, R.B. Fox, A.E. Evangelistaは、それぞれ自らの発掘に基づく新資料を提示して、Beyerの仮説を検証する動きが見られるようになった。特にSolheimは、Beyerの鐵器時代に関して、中部フィリピン、マスバテ島のKalanai洞穴遺跡から出土した遺物、主として土器の分類に基づいて文化の担い手及び年代観に新たな解釈を提案した。一方Foxは、パラワン島西海岸のTabon洞穴群を発掘調査することによって、パラワン島の先史時代の編年表を作製した。主としてC-14の

るが、一般にDvaravati期と称する6—11世紀間のどの時点に造られたものなのか。またインド仏との類似性を認めるなら、インドのどこのものと符合し、それがどのように相違するのか。これを明確にとらえることによってDvaravati仏の性格を知ることができる。

(スライド使用)

註1. 山本達郎：墮和羅国考，史林第28卷，第4号

註2. Pierre Dupont : L'archeologie Mône de Dvaravati, Ecole Française d'Extrême-Orient, vol. XLI, 1959, Paris.

註3. Quaritch Wales : Dvaravati, 1969, London.

註4. 伊藤平左衛門：暹羅古代法輪に就いての考察，「東洋美術」第11号，1931年

## フィリピンの先史時代

青柳洋治

フィリピンに於ける先史時代の研究は、1940年代後半に刊行されたH. O. Beyerの一連の著作に始まると言えよう。彼はRobert Heine-Geldernの強い影響のもとに自らの発掘及び国内全域に亘って表採された遺物を収集整理し、隣接諸国の出土遺物との比較研究から、フィリピンの先史時代を体系づけた。彼の時代区分は、旧石器時代（6期に細分され、年代として、凡そ500000—20000年前頃），中石器時代（2期に区分され、凡そ20000—8000年前頃），新石器時代（前期、中期、後期に区分され、後期に青銅器の出現を想定している。凡そ6000—200B.C.頃），鐵器時代（前期、後期に区分し、凡そ250B.C.—A.D.800頃），陶磁器時代（凡そA.D.800—1500頃）と5時代に大別されている。尚その年代は、明記されている如く、全くの“estimate”なものである。

1950年代以後になると、W.G. Solheim, R.B. Fox, A.E. Evangelistaは、それぞれ自らの発掘に基づく新資料を提示して、Beyerの仮説を検証する動きが見られるようになった。特にSolheimは、Beyerの鐵器時代に関して、中部フィリピン、マスバテ島のKalanai洞穴遺跡から出土した遺物、主として土器の分類に基づいて文化の担い手及び年代観に新たな解釈を提案した。一方Foxは、パラワン島西海岸のTabon洞穴群を発掘調査することによって、パラワン島の先史時代の編年表を作製した。主としてC-14の

年代測定によって、次の如き4期編年を提案している。旧石器時代（Tabon洞窟，後期旧石器時代のみ確認，それは4段階に区分されている。即ち剝片石器組成I  $9250 \pm 250$  B.P.。剝片石器組成II  $21000$  年以上 B.P.。剝片石器III  $23000 \pm 100$  B.P.。剝片石器IV  $30500 \pm 1100$  B.P.）新石器時代（2期に区分され，前期，Duyong洞穴， $4630 \pm 250$ ，後期，Manunggul洞穴  $2660 \pm 80$  B.P.），金属器時代（2期に区分され，前期，Ugau洞穴  $300 - 500$  B.C. の前後を推定，発展期，Manunggul洞穴 B.  $2140 \pm 100$  B.P. 尚この時期はA.D. 900年頃まで続くと推定），原史時代（南及び東アジア特に華南との接触及び交易の時代，Bubulangon洞穴I-B，北宋時代の陶磁器に依って10～11世紀を想定，Abiog洞穴，元及び明代初期の陶磁器に依って13～14世紀を想定）。EvangelistaはDuyong洞穴，Bato洞穴（ソルソゴン，ルソン島南部）の出土遺物の検討から，Beyerの新石器時代に関して，時期区分や土器の出現時期について，異なった見解を有している。尚，彼はフィリピン先史時代の代表的な遺跡として，Tabon洞穴（後期旧石器時代，洪積世）Duyon洞穴（後期旧石器時代，沖積世，及び前期新石器時代）Batungan洞穴（後期新石器時代，石器・土器組成）Bato洞穴（後期新石器時代，甕棺組成），Manunggul洞穴（後期新石器時代，初期鉄器時代）等をあげている。

又，Beyerは陶磁器時代と呼称し，Foxは原史時代と名付けている。中国の陶磁器を中心とする出土遺物とする時代の研究も活発である。

フィリピンの先史時代研究としては以上のものが主なものとして挙げられるかと思われる。最後に，1970年代に入って，マニラの国立博物館を中心として，北部ルソン，カガヤン渓谷の中期洪積世の自然環境と文化の様相を究明すべく，大規模なプロジェクトが組織され，その調査活動は既に開始されていることを附記しておきたい。

## 東 南 ア ジ ア の 文 学

### インドネシア文学発展に雑誌プジャンガ・バル が果たした役割

佐々木 信子

インドネシア文学を歴史的に考える時，最初に直面する問題は，「インドネシア近代文学の始まりはいつか？」である。この問題に対して，インドネシア社会，特に文学界は実に種々の

年代測定によって、次の如き4期編年を提案している。旧石器時代（Tabon洞窟，後期旧石器時代のみ確認，それは4段階に区分されている。即ち剝片石器組成I  $9250 \pm 250$  B.P.。剝片石器組成II  $21000$  年以上 B.P.。剝片石器III  $23000 \pm 100$  B.P.。剝片石器IV  $30500 \pm 1100$  B.P.）新石器時代（2期に区分され，前期，Duyong洞穴， $4630 \pm 250$ ，後期，Manunggul洞穴  $2660 \pm 80$  B.P.），金属器時代（2期に区分され，前期，Ugau洞穴  $300 - 500$  B.C. の前後を推定，発展期，Manunggul洞穴 B.  $2140 \pm 100$  B.P. 尚この時期はA.D. 900年頃まで続くと推定），原史時代（南及び東アジア特に華南との接触及び交易の時代，Bubulangon洞穴I-B，北宋時代の陶磁器に依って10～11世紀を想定，Abiog洞穴，元及び明代初期の陶磁器に依って13～14世紀を想定）。EvangelistaはDuyong洞穴，Bato洞穴（ソルソゴン，ルソン島南部）の出土遺物の検討から，Beyerの新石器時代に関して，時期区分や土器の出現時期について，異なった見解を有している。尚，彼はフィリピン先史時代の代表的な遺跡として，Tabon洞穴（後期旧石器時代，洪積世）Duyon洞穴（後期旧石器時代，沖積世，及び前期新石器時代）Batungan洞穴（後期新石器時代，石器・土器組成）Bato洞穴（後期新石器時代，甕棺組成），Manunggul洞穴（後期新石器時代，初期鉄器時代）等をあげている。

又，Beyerは陶磁器時代と呼称し，Foxは原史時代と名付けている。中国の陶磁器を中心とする出土遺物とする時代の研究も活発である。

フィリピンの先史時代研究としては以上のものが主なものとして挙げられるかと思われる。最後に，1970年代に入って，マニラの国立博物館を中心として，北部ルソン，カガヤン渓谷の中期洪積世の自然環境と文化の様相を究明すべく，大規模なプロジェクトが組織され，その調査活動は既に開始されていることを附記しておきたい。

## 東 南 ア ジ ア の 文 学

### インドネシア文学発展に雑誌プジャンガ・バル が果たした役割

佐々木 信子

インドネシア文学を歴史的に考える時，最初に直面する問題は，「インドネシア近代文学の始まりはいつか？」である。この問題に対して，インドネシア社会，特に文学界は実に種々の

意見を今日まで提出してきている。

今回の発表では、1933年にインドネシア人青年作家詩人の熱望によって創刊された、本格的な文芸雑誌の第一号である「プジャンガ・バル」が、近代インドネシア文学発展に果たした役割について、①インドネシア文学の時代区分 ②「プジャンガ・バル」の発刊とその経過 ③インドネシア語近代化に対する「パライ・プスタカ」と「プジャンガ・バル」 ④新文化運動の推進者としての「プジャンガ・バル」を「文化論争」に見る。

以上の四点を大きな柱として述べてみたい。時代区分について、これまでに発表された多くの意見を大きく三つに分け、発表者はインドネシア文学は1920年代に始まり、インドネシア文学発展の初期においては、オランダ政府によって設立された「パライ・プスタカ」が少なからざる役割を果たした。1928年の「青年の誓い」は統一の言語としてのインドネシア語を高く掲げるもので、当時の民族運動の高まりを象徴するものである。「パンジ・プスタカ」の編集長をしていたアリシャバナを中心となって新しい雑誌「プジャンガ・バル」を創刊した原動力は何か？限られた紙面に、各地から洪水のように届けられた詩の数、そして文学に対する社会の関心の大きさが、彼ら青年グループに勇気と確信を与えたと考える。

標語に見られるように、第一年度の「文学、言語並びに文化一般の雑誌」から、第四年度以降の「インドネシアの新文化、統一文化形成のためのダイナミックな新精神を指導する月刊雑誌」へと視野を更に広げていった。

いわゆる「文化論争」は、第三年度の「新しい社会と文化を目指して」の欄が、その生みの親である。この論争は複雑化し、論争参加者間の意見のへだたりは大きいが、これがインドネシア一般社会に今後のインドネシアの歩むべき道を考えさせる機会を与えた意義は大きい。

「プジャンガ・バル」が「パライ・プスタカ」の地位をとってかわったように、やがて出現する新しい世代「45年代」は、「プジャンガ・バル」から巣立っていくのである。

## タイ古典文学に見られる二大潮流

吉川利治

インドシナ半島にタイ族の王朝が成立して以来、タイ族が生んだ古典文学には二つの大きな流れが見られる。

1) 『ラーマーヤナ』の系列

意見を今日まで提出してきている。

今回の発表では、1933年にインドネシア人青年作家詩人の熱望によって創刊された、本格的な文芸雑誌の第一号である「プジャンガ・バル」が、近代インドネシア文学発展に果たした役割について、①インドネシア文学の時代区分 ②「プジャンガ・バル」の発刊とその経過 ③インドネシア語近代化に対する「パライ・プスタカ」と「プジャンガ・バル」 ④新文化運動の推進者としての「プジャンガ・バル」を「文化論争」に見る。

以上の四点を大きな柱として述べてみたい。時代区分について、これまでに発表された多くの意見を大きく三つに分け、発表者はインドネシア文学は1920年代に始まり、インドネシア文学発展の初期においては、オランダ政府によって設立された「パライ・プスタカ」が少なからざる役割を果たした。1928年の「青年の誓い」は統一の言語としてのインドネシア語を高く掲げるもので、当時の民族運動の高まりを象徴するものである。「パンジ・プスタカ」の編集長をしていたアリシャバナを中心となって新しい雑誌「プジャンガ・バル」を創刊した原動力は何か？限られた紙面に、各地から洪水のように届けられた詩の数、そして文学に対する社会の関心の大きさが、彼ら青年グループに勇気と確信を与えたと考える。

標語に見られるように、第一年度の「文学、言語並びに文化一般の雑誌」から、第四年度以降の「インドネシアの新文化、統一文化形成のためのダイナミックな新精神を指導する月刊雑誌」へと視野を更に広げていった。

いわゆる「文化論争」は、第三年度の「新しい社会と文化を目指して」の欄が、その生みの親である。この論争は複雑化し、論争参加者間の意見のへだたりは大きいが、これがインドネシア一般社会に今後のインドネシアの歩むべき道を考えさせる機会を与えた意義は大きい。

「プジャンガ・バル」が「パライ・プスタカ」の地位をとってかわったように、やがて出現する新しい世代「45年代」は、「プジャンガ・バル」から巣立っていくのである。

## タイ古典文学に見られる二大潮流

吉川利治

インドシナ半島にタイ族の王朝が成立して以来、タイ族が生んだ古典文学には二つの大きな流れが見られる。

1) 『ラーマーヤナ』の系列

## 2) 『ジャータカ』の系列

『ラーマーヤナ』は韻文で書かれ、劇となって専ら宮中でのみ表演。国王の権威を物語り、その地位を正当化する文学、神王思想（Deva-Rāja）を支える宫廷文学。叙事的、王朝史的、都会的な特徴を持つ。これらの特徴を有する文学作品に、『イナオ』（ジャワ文学）『サームコック』（三国志演義）『ラーチャーティラート』等。

『ジャータカ』は三蔵經の一部、仏教の弘隆、転輪聖王（Cakravartin）の理念具現化のため輸入。教訓的、説法的ではあるが、口承的、民間説話的、世俗的、地方的。タイ族の民間伝承と結びつき、『パンニヤーサ・ジャータカ』を生む。長詩『クンチャーン・クンペーン』、スントーンブーによる『プラアバイマニー』もタイの民間伝承を基にジャータカ譚を織り込み、口承文芸を流麗な韻文学に仕上げ、独自の民族文学の世界を開いた。

「ベトナムの文学」川本邦衛 発表要旨は14頁掲載。

〔個人研究発表〕

## 車里・八百と元朝の羈縻

喜田幹生

周知の如く13世紀中葉中国に統一政権を樹立したモンゴル元朝（世祖忽必烈）は、急速に従来の漢人歴朝に倣った専制的官僚国家の体裁を整備している。地方制度も度重なる改組を経ているが、特に南中国では理蛮及び版図拡大政策の一環として雲南行省治下非漢民族諸族に對して一大遠征を実施せしめている。この結果、雲南では南詔王国が（1253頃）、ビルマではパガン王朝が（1287）それぞれ倒壊した。また、ジャヤヴァルマン7世（1181～1218頃）のもとに再度の極点に達したアンコール朝クメールがこれと相前後して衰退はじめている。これらの諸条件を背景にして、大陸東南アジアの歴史は、著しい変貌を遂げたと一般に指摘されている。とりわけこの時期各地に小王国を形成せしめたタイ系諸族の動向は際立っており、その後代に与えた影響には看過しえぬものが多いと思われる。

タイ族史。タイ国史の研究に於ける内外先学諸氏の業績を時代別に概観した場合、スコータイ朝を境にしてそれ以前原郷南中国での態様及び南詔問題を中心とするものと、それ以降アユタヤ朝から現在に至るものとに大別されるが、その前後の接点ともいべき時代・地域とともに例えば大理国、滇緬暹交界の群小王国などに関しては、極端に考察が稀薄でいわば欠落部分と

## 2) 『ジャータカ』の系列

『ラーマーヤナ』は韻文で書かれ、劇となって専ら宮中でのみ表演。国王の権威を物語り、その地位を正当化する文学、神王思想（Deva-Rāja）を支える宫廷文学。叙事的、王朝史的、都会的な特徴を持つ。これらの特徴を有する文学作品に、『イナオ』（ジャワ文学）『サームコック』（三国志演義）『ラーチャーティラート』等。

『ジャータカ』は三蔵經の一部、仏教の弘隆、転輪聖王（Cakravartin）の理念具現化のため輸入。教訓的、説法的ではあるが、口承的、民間説話的、世俗的、地方的。タイ族の民間伝承と結びつき、『パンニヤーサ・ジャータカ』を生む。長詩『クンチャーン・クンペーン』、スントーンブーによる『プラアバイマニー』もタイの民間伝承を基にジャータカ譚を織り込み、口承文芸を流麗な韻文学に仕上げ、独自の民族文学の世界を開いた。

「ベトナムの文学」川本邦衛 発表要旨は14頁掲載。

〔個人研究発表〕

## 車里・八百と元朝の羈縻

喜田幹生

周知の如く13世紀中葉中国に統一政権を樹立したモンゴル元朝（世祖忽必烈）は、急速に従来の漢人歴朝に倣った専制的官僚国家の体裁を整備している。地方制度も度重なる改組を経ているが、特に南中国では理蛮及び版図拡大政策の一環として雲南行省治下非漢民族諸族に對して一大遠征を実施せしめている。この結果、雲南では南詔王国が（1253頃）、ビルマではパガン王朝が（1287）それぞれ倒壊した。また、ジャヤヴァルマン7世（1181～1218頃）のもとに再度の極点に達したアンコール朝クメールがこれと相前後して衰退はじめている。これらの諸条件を背景にして、大陸東南アジアの歴史は、著しい変貌を遂げたと一般に指摘されている。とりわけこの時期各地に小王国を形成せしめたタイ系諸族の動向は際立っており、その後代に与えた影響には看過しえぬものが多いと思われる。

タイ族史。タイ国史の研究に於ける内外先学諸氏の業績を時代別に概観した場合、スコータイ朝を境にしてそれ以前原郷南中国での態様及び南詔問題を中心とするものと、それ以降アユタヤ朝から現在に至るものとに大別されるが、その前後の接点ともいべき時代・地域とともに例えば大理国、滇緬暹交界の群小王国などに関しては、極端に考察が稀薄でいわば欠落部分と

なっているのが現状ではないかと思われる。これは言うまでもなく現在の政治情勢からみて実地研究に困難な地域を含んでいること、また史料の分布・記述などに於ける偏りといった障害を原因とするのであろうが、歴史上南中国・東南アジアの密接不可分な関係を考えた場合甚だ不幸な事態であると言える。

今回の報告で対象とする車里（現雲南省西双版納傣族自治州域を中心としたタイ・ルー族の王国といわれる）及び八百（現タイ国チェンマイを中心とした所謂ラン・ナ王国といわれる）は、13世紀後半及び14世紀前半に幾度か確執をおこしている。そこで、元朝側土司政策運用の面から、至元末年より大徳年間にかけて両王国がどのような動きを示しているか、特に劉深による征八百を中心として考え、併せてタイ族史・タイ国史研究といった視点からの今後に待つべき課題の幾つかを指摘したい。（「羈縻」は唐朝理蛮政策の用語であろうが、ここでは「以夷制夷」として広義に用いた。土司制度そのものは明代に完成されている。）

## タイ宗教における「持続」と「変容」

### — Chao Phou 信仰の提起するもの —

森 幹 男

タイ国メナム・チャオピヤ下流平野において、積極的に持続・展開される Chao Phou 信仰（仮称）の意味するところのものについて考えたい。

「カミの台座」 khon song chao を媒介に、天界から降臨する「高貴靈」 Phra winyan を、"Chao Phou" — 我らの父なる御靈 — と呼称して祭祀を行ない、これに加護と奇跡の発現を期待する信仰の様式である。

外来高度宗教たるテラバーダ仏教と土着民族宗教（phi 崇拝）とのシンクレティズムの教義内容と儀礼の体系を所有、その他、多くの俗信的要素を加味・吸合した雑信仰的な宗教形態を特色としている。

Chuai Manut（衆生救済）の名のもとに、Chao Phou はその「施術」をもって、個人的・日常的な不平不満の解消と各種の災害の除去に従事し、これにより、タイ一般人の現世利益・現世救済の願望に対する最も直接的な解答者として、現在、その支持と共感の基盤を急

なっているのが現状ではないかと思われる。これは言うまでもなく現在の政治情勢からみて実地研究に困難な地域を含んでいること、また史料の分布・記述などに於ける偏りといった障害を原因とするのであろうが、歴史上南中国・東南アジアの密接不可分な関係を考えた場合甚だ不幸な事態であると言える。

今回の報告で対象とする車里（現雲南省西双版納傣族自治州域を中心としたタイ・ルー族の王国といわれる）及び八百（現タイ国チェンマイを中心とした所謂ラン・ナ王国といわれる）は、13世紀後半及び14世紀前半に幾度か確執をおこしている。そこで、元朝側土司政策運用の面から、至元末年より大徳年間にかけて両王国がどのような動きを示しているか、特に劉深による征八百を中心として考え、併せてタイ族史・タイ国史研究といった視点からの今後に待つべき課題の幾つかを指摘したい。（「羈縻」は唐朝理蛮政策の用語であろうが、ここでは「以夷制夷」として広義に用いた。土司制度そのものは明代に完成されている。）

## タイ宗教における「持続」と「変容」

### — Chao Phou 信仰の提起するもの —

森 幹 男

タイ国メナム・チャオピヤ下流平野において、積極的に持続・展開される Chao Phou 信仰（仮称）の意味するところのものについて考えたい。

「カミの台座」 khon song chao を媒介に、天界から降臨する「高貴靈」 Phra winyan を、"Chao Phou" — 我らの父なる御靈 — と呼称して祭祀を行ない、これに加護と奇跡の発現を期待する信仰の様式である。

外来高度宗教たるテラバーダ仏教と土着民族宗教（phi 崇拝）とのシンクレティズムの教義内容と儀礼の体系を所有、その他、多くの俗信的要素を加味・吸合した雑信仰的な宗教形態を特色としている。

Chuai Manut（衆生救済）の名のもとに、Chao Phou はその「施術」をもって、個人的・日常的な不平不満の解消と各種の災害の除去に従事し、これにより、タイ一般人の現世利益・現世救済の願望に対する最も直接的な解答者として、現在、その支持と共感の基盤を急

速に拡大しつつある。

ここでは、まず、Nonthaburi, Thonburi, KrungthepおよびSamutprakanの四県において採集したChao Phouの降臨事例（合計126例）—73年1月末日現在—の整理・分析をもとに、1. 霊の種類 2. 信者の期待関心 3. Chao Phouの「施術」の実際 4. その日常儀礼 5. 年間祭祀……などを瞥見し、これを通じて、Chao Phou信仰の平均値的全体像の素描を試みたい。

次に、この信仰が、「都市化」過程の地域において集中的に観察されるところから、これを社会の変動期における既成の宗教秩序と信仰の体系の、時代反応的な変質もしくは新展開の現象として仮定し、Chao Phou信仰の成立与件をめぐって、若干の印象批評的な仮説提起を行なおうとするものである。

---

### 杉本直治郎先生を偲んで

丹羽 友三郎（三重短期大）

9月5日、この日は、北海道大学法学部を会場として開催されていた、法制史学会第25回総会の第2日目であった。午後的小休憩の時、控室において、関西大学の大庭脩氏から、杉本直治郎先生が逝去せられたことを聞かされ、一瞬眼前が真暗になった。同氏から借覧した読売新聞朝刊の計報によると、先生は、3日午後8時、狭心症のため、京都市左京区一乗寺松田町の自宅で死去され、告別式は、5日正午から京都市左京区東山二条の専念寺で行われるとのことである。読み終ったのちも半信半疑で、再び読み返したほどであった。こうして、先生のご逝去を知ったときは、とっくに告別式は終っているころではあったが、すぐにでも馳せ参じたいと、心は京都に飛んだが、身は札幌にあり、まことに、やるせない気持であった。それからあと、総会の行事としては、ベルリン自由大学のクヌール・シュルツ氏の「10・11世紀におけるグルントヘルシャフトの諸問題—ウォルムス莊園法をめぐって—」と題する特別講演や、サッポロビール第2工場の大宴会場において、ジンギス汗なべをつついでの懇親会があ

速に拡大しつつある。

ここでは、まず、Nonthaburi, Thonburi, KrungthepおよびSamutprakanの四県において採集したChao Phouの降臨事例（合計126例）—73年1月末日現在—の整理・分析をもとに、1. 霊の種類 2. 信者の期待関心 3. Chao Phouの「施術」の実際 4. その日常儀礼 5. 年間祭祀……などを観察し、これを通じて、Chao Phou信仰の平均値的全体像の素描を試みたい。

次に、この信仰が、「都市化」過程の地域において集中的に観察されるところから、これを社会の変動期における既成の宗教秩序と信仰の体系の、時代反応的な変質もしくは新展開の現象として仮定し、Chao Phou信仰の成立与件をめぐって、若干の印象批評的な仮説提起を行なおうとするものである。

---

### 杉本直治郎先生を偲んで

丹羽 友三郎（三重短期大）

9月5日、この日は、北海道大学法学部を会場として開催されていた、法制史学会第25回総会の第2日目であった。午後的小休憩の時、控室において、関西大学の大庭脩氏から、杉本直治郎先生が逝去せられたことを聞かされ、一瞬眼前が真暗になった。同氏から借覧した読売新聞朝刊の計報によると、先生は、3日午後8時、狭心症のため、京都市左京区一乗寺松田町の自宅で死去され、告別式は、5日正午から京都市左京区東山二条の専念寺で行われるとのことである。読み終ったのちも半信半疑で、再び読み返したほどであった。こうして、先生のご逝去を知ったときは、とっくに告別式は終っているころではあったが、すぐにでも馳せ参じたいと、心は京都に飛んだが、身は札幌にあり、まことに、やるせない気持であった。それからあと、総会の行事としては、ベルリン自由大学のクヌール・シュルツ氏の「10・11世紀におけるグルントヘルシャフトの諸問題—ウォルムス莊園法をめぐって—」と題する特別講演や、サッポロビール第2工場の大宴会場において、ジンギス汗なべをつついでの懇親会があ

ったが、真実のところいずれも身が入らず、快々として愉しめなかつた。

翌くれば9月6日、朝食もそこそこに宿を立ち、午前10時15分、定刻より20分遅れの出発ももどかしげに、日航570便で千歳から伊丹へ。正午すぎ到達するや、直ちに京都に向い、午後3時ごろには、ご自宅でご靈前に額づくことができた。貴美未亡人の話されるところによれば、先生はお近くの一乗寺北大丸町にある小野病院から、夕食後の散歩かたがた、来翰等を処理するため自宅にもどられ、入浴を愉しまれるのが日課であった。この日も、種々閑談されたのち、風呂に入られたが、余りにも静かである。不思議に思いお呼びすれども返事がない。風呂場をあけると、浴槽にうつ伏せになっておられた。近所の人々に助けを求め、總がかりでお救いしたが、主治医が駆けつけたときには、すでにこの世の人ではなくておられたとのことで、まことに急なご最期であった。

数年前から、先生ご夫妻は伊勢参宮を熱望しておられた。種々雑事に追われて、ご案内することが延び延びになっていたが、ようやく昨年5月の連休あけ、車で京都までお迎えに赴き、8日・9日の両日、伊勢、志摩の観光に終始お伴をすることができ、たいへんお喜びになられた。その後幾何もなくして、夏ごろ小野病院に入院された。伊勢・志摩の旅のお疲れが原因ではないかと心配したが、これと云った病気はないけれど、老人のこととて人間ドック式に利用しているだけだとのお便りであった。一度お見舞いしなければと思いつつ、その年も暮れに近づき、年の瀬も押し迫った12月29日にお見舞したが、至ってお元気で、ベットの上に正坐され、せっせと原稿を書いておられた。『東方学会創立25周年記念東方学論集』を飾った、「マルコ・ポーロのチャンバ国來訪の年次」と題する論文は、こうして、ご入院中にベットの上で成ったものである。

今年に入ってからは、さらに回復に向われ、2月には広島文教女子大学へ、3月には愛媛大学へ、集中講義に赴かれたとのお便りで、すっかり安心し切っていた。しかるに、夏にはまた病勢が革ったことを知らされた。大分へ湯治にゆかれたところ、浴場で滑って胸を打たれたとのことである。8月18日、所用のために広島に赴く途次、お見舞いいたしたところ、湿布のお蔭で胸の痛みも直ったが、だんだん体が衰弱してゆくのが自分でわかるようだ。とぐに視力が弱まることと、食欲がなくなった。これまで細いことをこつこつ研究してきた。これも意味があったのだが、もっと大観的に考察することが肝要であると思えてきた。これからは命ある限り、このような観点から、もう一度いままでやってきたことを再検討したいと思っている。やるべきことが多いので、もうしばらくは元氣でいたいと、しみじみ述懐しておられた。

その夜8時半ごろ辞去するわたくしを、夜道を送ってくださる。どこまでもついてこられるので、固辞して途中からお帰り願った。淋しげに、さらに丸味を増した猫背をかがめられて、すごすごと遠ざかり行く後姿を、ほのかな街灯が照らしている。やがてお姿が見えなくなるまでお見送りしたが、これが今生のお別れであった。

やがて、8月26日付けの先生からのはがきが、翌27日に届いた。先般の見舞い、ならびに藤井千之助氏への伝言に対する、鄭重な謝辞からはじまり、同氏から届いた詳細な手紙を殊の外喜ばれ、最後に広島行きは忙しかったろうが、それだけに収穫があったことと思う。近ければいろいろ様子を承るのだがと結んであった。例のように、表・裏とも細い文字で横書きされた、きちようめんな先生のお便りであるには相違ないが、行がやや乱れ、誤字もめだち、宛名も住居表示実施以前の旧町名である。全体的に、いつものような筆勢に欠けている。どうもこれまでの先生ではないぞと、少々危ぶまれたが、これが先生最後のお便りになろうとは、神ならぬ身の測り得ぬところであった。折り返えし病院宛に返信を差し上げたので、先生とわたくしの連絡は、8月の終りごろまでは続いていたことになる。それから僅かに数日で、先生が不帰の客となられようとは。

虚飾を好み先生は、常に全身全靈を以て学生と接し、ともに語らい、ともに運動し、謡曲を愉しました。在学中は言うまでもなく、卒業後も、すべての教え子達から慈父の如くに慕われ、すぐれた教育者であられたが、また、精細をきわめた独自の考証的学風と、その結晶ともいべき、『阿倍仲麻呂伝研究—朝衡伝考—』、『真如親王伝研究—高丘親王伝考』、ならびに『東南アジア史研究I』などの著作をはじめ、数多くの論稿が、学界を裨益するところが大であることは、わたくしがいまさら云々するまでもなかろう。いま、わたくしの手許には、先生80才の御時のご揮毫になる「尋道」、82才の御時、伊勢参宮に出発される朝、とくに用意して恵与くださった、「寄心清尚」の色紙が蔵せられている。いずれも落款に南翁とある。生涯を東南アジア史の研究に傾注された先生に、いかにも適応した号であり、いみじくもその文言からもうかがわれるよう、終始一貫して、謙虚かつ真摯、老いてますます盛んであられたその学究的情熱によって樹立せられた御業績は、まさしく、わたくしたちの前途を照らす永遠不滅の炬火として、いついつまでも輝き続けることであろう。先生から受けた深い学恩を思うとき、より一層の精進こそが必要であると、固く肝に銘ずるものである。

## 杉本直治郎先生を偲ぶ

伊東隆夫(広島大)

先生のご入院は、昨年9月下旬からであったが、12月にお見舞した時には、一向に病人らしくも見えず、毎日入浴のため、七・八分の距離のお宅に帰られていると承わり、さらに本年7月中旬には、ご本務の広島文教女子大に集中講義に出かけられた由であったので、9月3日夜ご急逝の悲報に接した時には、我が耳を疑った。病院をむしろ、ご研究の仕上げに格好の所とみておられ、しかもご生前とても楽しい日課の一つとされていた入浴中のご急逝と承れば先生ご自身には、正しく大往生であったに違いない。しかし、八十三才のご高齢に拘らず、「まだまだやるべきことが多い」と、お会いするたびに申されていた先生を失なったことは、三十有余年にわたって公私ともにお導きを賜わり、特に東南アジア史への関心へと馳り立てていただいた私にとっては、大きな支柱を失なった一大痛恨事と申す以外に言葉を知らないのみならず、わが国の東南アジア史学界の大損失と申すべきであろう。ご生前先生から承った数々の逸話が、今更のように私の脳裡に浮んでくる。滋賀師範ご卒業後、暫くの教職にご従事の上、広島高師に入学された頃が、大正の米騒動の時であったので、寮で米を食べない決意をされ、秋の放課後、毎日郊外(今は市内)まで無花果を食べに駆足されたこと、落日に向って走りながら、地球をポールと考えれば、それこそ宇宙の大遊戯“アース・ポール”だとて、その運動の首唱者となられたこと、桑原隣蔵先生との一対一の受講の模様、等々……を通じて、一たび“これを”と期せられた先生は、必ずそれに向って邁進されたご逝去に至るまでのあの真摯なお態度が、既に少壯の頃からのことであったことを教えられた。桑原先生謙りの考証的研究の手堅さは、一字一句を忽せにせず、精緻細密、博引傍証余す所がなかった。そのご成果が『阿倍仲麻呂伝研究』(昭15年)『東南アジア史研究I』(昭31年)、『真如親王伝研究』(昭40年)などのうちに公にされたことは、周知の通りであろう。中でも、第三のものは、親王の伝記の記述だけで大冊となり、その終焉地の羅越国問題は割愛せざるを得なかつたので是非『東南アジア史研究』の続篇として、世に問いたいと、常々申されていた。尤も、極めて最近、女婿の宮川満氏に、従来の研究法を少しく改めねばとお洩らしになつたとか、ご葬儀当日うかがつたが、或は、ご急逝の当日まで病院でお書きになっておられたご遺稿のうちに見出されるのではないかと、ひそかに期待申しあげている。しかし、“慈光院興学直道居士”とな

られた先生から、直接それをお聞きするすべもないのは、何としても残念である。今はただ先生のご冥福を祈るとともに、微力ながら、先生の残されたお教えを体して研究に専念したいとわが身に言いきかせつつ、ささやかな追悼文としたい。

(48. 9. 14)

## 杉本直治郎先生と私

高橋 保（アジア経済研究所）

恩師杉本直治郎先生が京都の御自宅で急逝されたとの知らせを受けたのは、本年9月4日の午後2時頃だったでしょうか。お亡くなりになったのは前日3日の午後8時、死因は狭心症とのことでした。享年83才。とり敢えず翌5日に京都岡崎公園近くの専念寺で行なわれた葬儀にはなんとか参列することが出来、また葬儀の後では短時間ながら先生の教えをうけた同門の先輩たちと一緒に先生を偲ぶ一ときをもつことが出来ました。

早いもので、今はもうそれから一ヶ月近く経ちました。しかし、今だに近年多少お体の調子が悪かったとはいえ、根が丈夫であられた先生が、あんなに早く突然お亡くなりになるとはとても信じられない気持で一杯です。

思えば、私は杉本先生には学問上はもちろんのこと、社会生活上の事についても、まことに多くを教えて戴きました。私は先生の広島大学教授在任時代の最も末期の弟子に当りますが、学部学生時代に先生のお教えを戴いてから次第に東南アジア史研究に興味をもち、爾来先生の御指導をうけながら今日に至りました。先生が広島大学御退官後もしばらく広島に在住されており、住いも近接していましたので、私は大学院時代5年間を通じて親しく先生の御指導をうけることが出来ました。その間、先生は私の幼稚でまとまりのない質問にもにこにこ笑顔を見せながらお聞きになり、懇切丁寧に御答え下さり、御所蔵の貴重な関係文献を気軽にお貸し下さったりしました。御発表になる論文の構想を解説して下さったり、出版社から送って来たグラを示して、校正の仕方などもいちいち細かく御教示下さいました。こうした先生の御指導のお蔭で、私はどうやら東南アジア史研究法の基礎を一通り学ぶことが出来たような次第でした。

私が大学院を修了して就職のため東京に移り、先生もその後お住いを京都にお移しになられた大学院時代ほどにお眼にかかる機会もなくなりましたが、時折拙ない論文の抜刷などをお送りすると、折返して丁寧な御札と御教示の御手紙を戴きました。「京都に出向く機会があれば、

られた先生から、直接それをお聞きするすべもないのは、何としても残念である。今はただ先生のご冥福を祈るとともに、微力ながら、先生の残されたお教えを体して研究に専念したいと  
わが身に言いきかせつつ、ささやかな追悼文としたい。

(48. 9. 14)

## 杉本直治郎先生と私

高橋 保（アジア経済研究所）

恩師杉本直治郎先生が京都の御自宅で急逝されたとの知らせを受けたのは、本年9月4日の午後2時頃だったでしょうか。お亡くなりになったのは前日3日の午後8時、死因は狭心症とのことでした。享年83才。とり敢えず翌5日に京都岡崎公園近くの専念寺で行なわれた葬儀にはなんとか参列することが出来、また葬儀の後では短時間ながら先生の教えをうけた同門の先輩たちと一緒に先生を偲ぶ一ときをもつことが出来ました。

早いもので、今はもうそれから一ヶ月近く経ちました。しかし、今だに近年多少お体の調子が悪かったとはいえ、根が丈夫であられた先生が、あんなに早く突然お亡くなりになるとはとても信じられない気持で一杯です。

思えば、私は杉本先生には学問上はもちろんのこと、社会生活上の事についても、まことに多くを教えて戴きました。私は先生の広島大学教授在任時代の最も末期の弟子に当りますが、学部学生時代に先生のお教えを戴いてから次第に東南アジア史研究に興味をもち、爾来先生の御指導をうけながら今日に至りました。先生が広島大学御退官後もしばらく広島に在住されており、住いも近接していましたので、私は大学院時代5年間を通じて親しく先生の御指導をうけることが出来ました。その間、先生は私の幼稚でまとまりのない質問にもにこにこ笑顔を見せながらお聞きになり、懇切丁寧に御答え下さり、御所蔵の貴重な関係文献を気軽に貸し下さったりしました。御発表になる論文の構想を解説して下さったり、出版社から送って来たグラフを示して、校正の仕方などもいちいち細かく御教示下さいました。こうした先生の御指導のお蔭で、私はどうやら東南アジア史研究法の基礎を一通り学ぶことが出来たような次第でした。

私が大学院を修了して就職のため東京に移り、先生もその後お住いを京都にお移しになられた大学院時代ほどにお眼にかかる機会もなくなりましたが、時折拙ない論文の抜刷などをお送りすると、折返して丁寧な御札と御教示の御手紙を戴きました。「京都に出向く機会があれば、

必ず自分の家に泊まるように」との有難い先生御夫妻の御言葉に甘えて、大抵の場合、京都での私の宿泊所は一乗寺の杉本先生宅でした。泊めて戴くことになった晩は、いつも学生時代の続きのように、色々な研究上の質問を先生に提出して御教示戴きました。私が杉本先生にお目にかかった最後は、やはりそうした京都の御自宅での御教示にあづかった本年3月のことでした。その折、私は1～2月のヨーロッパ旅行の報告をし、先生も40年前の御自身の留学時代を思い出されて大変なつかしがって居られましたが……。

杉本先生は、そのお著しなられた数々の名著、すなわち『阿倍仲麻呂伝研究——朝衡伝考』『印度支那に於ける邦人発展の研究——古地図に印されたる日本河に就いて』(共著)『東南アジア史研究I』『真如親王伝研究』などにうかがわれるよう、学問的には未開拓の東南アジア史研究の前進に大きく貢献され、一貫して徹底した実証研究を進められましたが、とくに史料批判(テクスト・クリティック)の面で最も厳密を期せられ、我々にもその重要性についていつも御注意下さいました。

先生はまた、かねがね「東南アジア史の研究はなお未開拓の分野である。それだけにやり甲斐があるのだが、労多くして功少ないのも事実なので、君もそれをよく覚悟して頑張るように。その困難さを克服して前進しうる方法は、ただ精進あるのみだ。」と語っておられ、また御自身それを身をもって示されました。上記の輝かしい御業績はその御努力の結晶に外なりません。今後とも、私はこの杉本先生の御遺訓に何とか沿うべく努力しながら、先生に手ほどきして戴いた東南アジア史研究の道をゆっくりながら歩んでいきたいと念願しております。

謹んで杉本直治郎先生の御冥福をお祈り致します。

### 阮朝官人の文学について

川 本 邦 衛

黎末阮初から19世紀中葉にかけてのベトナム文学について、興味を惹かれる事実のひとつは、字喃と漢字を混淆して書かれた長篇詩の盛行である。その頂点的な作品が阮攸Nguyễn Du の『金雲翫新伝』であり、それがベトナム古典文学の代表作とされていることは、本邦でも比較的よく知られている。

各行の音節数と押韻法、および平仄の交替について、極めて特徴的な規矩を有するこの長篇

必ず自分の家に泊まるように」との有難い先生御夫妻の御言葉に甘えて、大抵の場合、京都での私の宿泊所は一乗寺の杉本先生宅でした。泊めて戴くことになった晩は、いつも学生時代の続きのように、色々な研究上の質問を先生に提出して御教示戴きました。私が杉本先生にお目にかかった最後は、やはりそうした京都の御自宅での御教示にあづかった本年3月のことでした。その折、私は1～2月のヨーロッパ旅行の報告をし、先生も40年前の御自身の留学時代を思い出されて大変なつかしがって居られましたが……。

杉本先生は、そのお著しなられた数々の名著、すなわち『阿倍仲麻呂伝研究——朝衡伝考——』『印度支那に於ける邦人発展の研究——古地図に印されたる日本河に就いて——』(共著)『東南アジア史研究I』『真如親王伝研究』などにうかがわれるよう、学問的には未開拓の東南アジア史研究の前進に大きく貢献され、一貫して徹底した実証研究を進められましたが、とくに史料批判(テクスト・クリティック)の面で最も厳密を期せられ、我々にもその重要性についていつも御注意下さいました。

先生はまた、かねがね「東南アジア史の研究はなお未開拓の分野である。それだけにやり甲斐があるのだが、労多くして功少ないのも事実なので、君もそれをよく覚悟して頑張るように。その困難さを克服して前進しうる方法は、ただ精進あるのみだ。」と語っておられ、また御自身それを身をもって示されました。上記の輝かしい御業績はその御努力の結晶に外なりません。今後とも、私はこの杉本先生の御遺訓に何とか沿うべく努力しながら、先生に手ほどきして戴いた東南アジア史研究の道をゆっくりながら歩んでいきたいと念願しております。

謹んで杉本直治郎先生の御冥福をお祈り致します。

### 阮朝官人の文学について

川 本 邦 衛

黎末阮初から19世紀中葉にかけてのベトナム文学について、興味を惹かれる事実のひとつは、字喃と漢字を混淆して書かれた長篇詩の盛行である。その頂点的な作品が阮攸Nguyễn Du の『金雲翫新伝』であり、それがベトナム古典文学の代表作とされていることは、本邦でも比較的よく知られている。

各行の音節数と押韻法、および平仄の交替について、極めて特徴的な規矩を有するこの長篇

詩は、その詩型と内容によって、ベトナム人の文学的美意識を十分に窺わせるものだといつてよい。ただし、やや短いもので数百行、長いものは三千行以上に及ぶこれらの韻文は、原則として演音 *di ên âm* と称する、ほかに例のない創作方法によって成立している。このことは主要な作品にそれぞれ中国語による藍本が存在することを意味するが、このために、従来しばしば、ベトナム文学が中国明清時代における通俗小説の模倣とみられることがあったのは否めない。しかし少くともこれらの長篇詩に関しては、模倣あるいは翻案・翻訳文学という観点と、次元を異にした解釈が必要であるとともに、それが如何なる時代を背景にして行われたかという側面の考察によって、阮朝官人社会の一部に共通する意識を探ることができるとと思う。

さらに、これらの長編詩の作者は、一般に絶句や律詩などの創作に巧みな、すぐれた漢詩人であったと想定されるが、阮攸をその例にとるならば、その漢詩に表象された世界観や時代感覚は、中国的教養が官人の理想とされたこの時代に輩出した漢詩人のなかで、長篇詩の演音者とならなかったもののそれとは著しく隔たること、また逆に 19 世紀中葉に現われた、漢詩を遺していない、長篇詩の作者が、その創作態度において、阮朝初期の官人たちと、まったく異なる文学を志向していることを勘案しながら、標題のテーマについて考えるところをのべてみたい。

---

発行日 昭和 48 年 11 月 1 日

発行者 東南アジア史学会

住 所 〒114 東京都北区西ケ原 4-51-21

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

電 話 (03)917-6111

振 替 東京 59721

---